高体連も目を光らせている中で、容易に堂園と練習試合など組めそうにない。叶にはどんな秘策があるというのだろうか。まもなく、その答えは**新聞でなされた**。扶桑に興味をもってくれたあの記者に叶がお願いし、**一面を飾った**のだ。

毎朝スポーツ
サッカーで対決
TV発言急転回
調整練習にと扶桑高が申し込む
秩父宮ラグビー場で
『役に立てば』と友情

**秩父宮ラグビー場で、サッカーで対決**ときた。ぶっとんだ発想には脱帽せざるをえない。しかし、ラグビー界から疎まれ、校長にも見捨てられた今、**どうやって秩父宮を借りることに成功したのだろうか。**

堂園サイドもビックリだ。監督は、プンプン怒っているが、堂園の部員達は全会一致でサッカー対決を引き受けることにした。
監督「サッカーなのに、場所が秩父宮とはどういうことなんだ！」
白鷺「だから･･･ラグビーの調整練習だからでしょう？」
と、**堂園はいつのまにかすっかり扶桑の味方**になってしまっている。主将ですら、「この挑戦には、堂園ラガーの･･･いや、**男の矜持**がかかっていることだけは確かだ！受けて立つしかないっ！」と、言い放ち仲間を鼓舞した。‘矜持（きょうじ）’なんて難しい言葉を使いよる。

その日がやってきた。観客もバカにならない人数が来ている。みな、何が起こるのか興味津津なのだ。**上のロイヤルボックス**には高体連のお偉いさん方も様子を伺いに来ているらしい。怒り心頭だった校長だが、やはり自分がつくったラグビー部が気になるのか、こっそり彼も観に来ている。あと、**例の菅平の爺さんも**。
さあ、**サッカーの練習試合が始まった**。堂園はメンバーの 2/3 がサッカー経験者ということで扶桑を圧倒。お話にならない。あまりに退屈な試合展開に、観客からは「ラグビーをやれ！ラグビー！！ラグビー！！ラグビー！！」とコールの大合唱がかかる。

これは**全て叶の計算通り**のことだった。さすが策士、叶。
叶は、その様子を確認すると、サッカーボールを持って、そのまま走り始めたのだ！！すかさず、堂園はタックルにかかる。サッカーボールでラグビーを始めたのだ。そう、これはまさに**ラグビーのルーツ！**
記者さん「**ラグビーはもともとサッカーのルール破りから始まった･･･いわば、サッカーからの落ちこぼれなんや！**あいつら落ちこぼれにふさわしいスポーツやないか！！」
と、考え抜かれたセリフを言う記者さんだが、地味に‘サッカー＞ラグビー’という図式を支持してしまっているのが哀しい。

レフェリーはいないが、そのぶんまで清く正しく、セルフジャッジでサッカーボールラグビーをする両校。高体連の理事長も、ボールがまだサッカーボールであるため、まだ差し止めるには躊躇している様子だ。
すると白鷺「叶！おまえだけを悪者にはしないぜ･･･高岡！楕円形のボールを出せ！」と命じた。いったんは白鷺に諮る堂園主将。**監督はガン止め**。
白鷺「花園がなんだ！全国大会がどうしたっ！この試合には男の誇りがかかっているんだっ！」
この言葉に押され、主将もボールを替えることに同意した。

結局、試合は普通のラグビーと相成った。
すると、校長や記者たちのところへある親子が。どうやらこの子は中学生で、ラグビーに憧れ、堂園に入りたいらしい。父親はラグビーというスポーツを心配し、念のためどういう感じなのか観にきたという形だ。少年は堂園のナイスプレーを見てもらって、堂園入学に OK を出してもらいたようだ。

さあ、扶桑も猛練習で大幅に成長している。ましてや、タレント自体は粒揃いで、伊達も加入した。はじめて堂園とやったときとは、もはや別チームである。
一方の堂園も一流。簡単に通用した伊達のステップや大熊の突進も組織力で潰され、一進一退の攻防が続く。しかも、その間互いに**セルフジャッジ**を忘れない。
すると、**高体連理事長**から何か言づてがきた。
「レフェリーもいないし、これは試合でもなんでもないが、それでも負けたとなれば大問題です。その場合は全国大会出場についても考えることになります」
**･･･面倒くさいカラミ**である。**空気の読めないオトナ**というのはこのことだろう。
例の親子であるが、激しいプレーの様子をみて、父親はやっぱり息子にラグビーをさせることを許さない。ましてや、息子は今骨折中。慎重になるのもわかる。でも、その子はそれでも一生懸命父親にラグビーの素晴らしさを説く。それも、**扶桑と堂園の正々堂々とした戦い振りを引き合いに出して**。

この様子を見て、校長は日輪ちゃんにレフェリーに行くように命じる。
校長「あいつらのラグビーを認めたわけじゃない。だが、こんな試合でも一人の少年がラグビーの素晴らしさを説いているんじゃ。せめてレフェリーぐらいはおいて、試合らしくしてやらんと失礼じゃい･･･」

日輪ちゃんがレフェリーに入って試合は流れ続ける。「真近でみると全然違う！」「いつもはチャランポランなくせに、ボールを見る目は･･･」と新鮮な驚きを隠せない日輪ちゃん。なかなかレフェリングにも苦労しているが、叶は「気にするな」と優しい。
さて、もともとレフェリーもなく始まった試合。お互いにノートライノーゴールだが、**すでに 2 時間が経過**していた。ハーフタイムも何もない。どう決着をつけるのだろうか？と観客もいぶかしがる。
すると、ここでネコが十八番のジャンプステップ！と見せかけた後方宙返り＋叶へのパスで叶がインゴールへ飛び込んだ！堂園フォローDF も諦めていない。

際どい！タッチか？トライか？
**日輪ちゃん、タッチを宣言**した。もう 2 時間たってるんだし、そこはトライにしてあげようよ･･･。反論しようとする伊達。しかし、叶はかなりのダメージを体に追いながらも、伊達を制止する。
叶「日輪はな･･･俺達のことを落ちこぼれだの悪たれだのと言いはするが･･･**ラグビーをやる資格がないとは一度も言ったことがないよ･･･**」
そこが、ひばりが丘戦のレフェリーと日輪ちゃんとの大きな違いだったのだ！

長引く試合に、「ドロップゴールを狙え！」と白鷺に言う主将だが、白鷺は「この試合は時間も得点もない･･･**ただワン・トライをあげるための戦い**なんだ！」と主張する。
徹底マークを受け、叶もかなりのダメージを受けている様子だ。それでも、倒れても何度も何度も叶は立ち上がってくる。
その様子を見て、例の親子
父「浩･･･堂園へは行かせん･･･」
浩くん「こんなすごい試合をみても、まだラグビーの素晴らしさがわかんないのかよ！」
父「堂園へは行かせんと言ったが･･･ラグビーをやるなとは言ってない。おまえは･･･あの叶くんがいる扶桑高へいけ！」
えーっ！いいんですか、お父さん！**絶対堂園のほうがいい**と思いますけど！
しかし、叶には何か人を惹きつける魅力があるのであろう。これぞ、叶マジック。

試合開始から **3 時間**。ついに日輪ちゃんは動けなくなってしまった。今度はかわりに冴木監督がレフェリーに入った！この辺、きちんと女子を絡めてラグビーに参加させているところが、**作者はしっかりしている**。
試合の流れをむやみに止めるような笛だけはやめてくれ、と頼む叶と白鷺。試合時間や得点なんてどうでもいい、ワントライのためだけに戦っているんだから。それを快諾する冴木監督。
おかげで、ほとんど流れの止まらない試合に、観客達も大興奮だ。
叶も、22m 内でのキックキャッチをフェアキャッチにせずにそのまま突っ込むなど、観客をノせるのが上手だ。だが、その無謀なカウンター攻撃も完全に潰され、叶はもはや満身創痍な状態。今度は立てるか？叶！

**立った。すごいことになっている**。観客も「あれぜんぶアザかよ･･･あれでよく立っていられるな」、日輪オヤジ「今度は一週間じゃ治せやせんぞい･･･」と驚愕。

しかし、叶「このおれの体はな･･･**うれしくて震えているんだぜ･･･**」と歓喜にむせている。**ズバリ、ドＭで間違いない**であろう。

ついに試合は **4 時間**を過ぎた。敵陣でのペナルティを得ると、ついに扶桑は勝負を決めるためのとっておきの作戦に出た！**作戦の名はアマゾネス！！**監督につけたアダ名のコードネーム･･･それが表すものは･･･そう、**叶を核弾頭にした 15 人総勢での突入**であった。
堂園は、15 人全員で守るのか、ひょっとしたらあるかもしれない BK 展開に備えるべきか、どう守るかで迷いを見せた。これが命取りになった。

「扶桑、叶くんの体ごとかかえて堂園の壁を突き破ったァ！！」と、すさまじい実況がなされているが、**誰が実況しているのであろうか**。ただの**サッカーの練習試合**だったはずで、実況など用意されているはずはないのだが。

しかし、これで雌雄は決された！**熱闘 5 時間！**扶桑の勝利で試合は幕を閉じたのだ。
皆が感動した。高体連の理事長までも、「こんなすごい練習はみたことがない･･･胸を張って花園へ行ってください！」と言づてをよこしてきた。
しかし、白鷺は「監督･･･おれたちは高体連の警告を無視して‘ラグビー’をやりました。ですから出場は辞退してください！」と主張する。
行くことを勧める叶だが、白鷺は「この戦いが･･･全国大会出場にかえられるかよ！」と言う。しかし、**損はないんだから出ればいいのに**。
･･･という発想は高体連側も同じこと。「なぜだ！辞退する理由がないじゃないかァ！」
すると堂園の主将、「白鷺、もとはと言えば都予選の決勝後のインタビューでの宣言から始まったんだ･･･よくぞいってくれた･･･しかし、監督や主将のおれを無視した･･･自分勝手な独断専行は許されん！」と一喝するとともに、

**すかさず、白鷺へパンチ**。そして、「**部員の暴行･･･これが辞退の理由です**」とキメた。カッコよすぎるぞ･･･主将！そして、2 年生であった白鷺に次期主将の座を引き継ぐことを宣言。当然、満場一致で白鷺の主将就任が決まった。

こうして、波乱をよんだ堂園 vs 扶桑の**サッカーの試合**は、その事後処理まで含め、全てを完結したのだった。
冴木監督「最高だぜ･･･お前たち！」
一方の校長も、一人立ち去りながら「ぞんぶんにみせてもらったわい、おまえらのラグビーとやらを！**たとえいやだといってもわしのほうからとことんつきあってやるわい！**」と心に決めていた。後半部は**多少暑苦しい**。

だが、依然**認可は剥奪されたまま**の扶桑。この後はどうするというのだろうか･･･。